

畳空間にかかわる住様式と住意識の検討—熊本の注文戸建住宅における— 住宅計画時の畳空間に対する住要求と平面動向

○牧野 唯* 今井範子** (*島根女短大, **奈良女大)

【目的】熊本県下の注文戸建住宅を対象として畳空間の実態や居住者意識を把握し、住空間の地域性を検討するための基礎資料とすることが本研究の目的である。本報では、これまでの調査に引き続き、地方での状況を明らかにするため、いぐさの主産地でもある熊本を対象とした。

【方法】熊本県住宅供給公社が開発分譲した 5 地域を選定し、注文戸建住宅を対象に留置法自記式による質問紙調査を実施した(1999年8月～9月)。有効サンプル数は世帯票 195, 個人票 332 である。

【結果】①畳室数は、1室が多く(50.0%)、2室も多い(35.6%)。畳室のない住宅は3戸である。平均延床面積は 136.8 m²(SD=26.4)、平均畳室数は 1.6 室(SD=0.8)である。延床面積が「100～150 m²」の平均規模の場合に畳室 1 室が多い。「畳の続き間」を有するのは調査住宅全体の約 2 割をしめ、「150～200 m²」の多少ゆとりのある住宅に「続き間」が多い。②住宅の計画時に「畳の間にしたい空間があった」とする世帯が 8 割をしめる。その部屋は「客間」が多く、「主寝室」「居間」「茶の間」の希望が続く。世帯主年齢が、特に 40 代と 30 代以下の若い年齢層に「客間」の希望が 8 割をこえる。なお、20～30 代には「祖父母室」の希望が 2 割弱と比較的多い。畳室計画時の希望(自由記述)からは、「畳の続き間」の希望が最も多く、「広くとりたい」という希望等がみられた。③居住者の中には、親や親戚をもてなす改まった空間として畳室を確保したいという要求が存在する。さらに、高齢夫婦のみの世帯において、遠居の子供家族が帰郷してくることを考慮し、宿泊のための畳室を設けていることなどが、熊本の特徴として指摘できる。文部省科学研究費(基盤研究C:研究代表者 今井範子)による。